

ワシコイシ寄席

其の十一

八代目林家正蔵のお家芸を継承し、
芝居・怪談の第一人者。
音曲・芝居、新作落語、文楽人形との
ジョイントなど精力的に活躍。



林家正雀

林家彦三

- 1974年 八代目林家正蔵に入門
前座名「茂蔵」後に「繁蔵」と改名
1978年 ニツ目昇進 「正雀」と改名
1982年 八代目正蔵没後、嫡家文蔵一門に
1983年 真打昇進
受賞
1979年 第8回 NHK新人コンクール最優秀賞
1996年 平成8年度 芸術選奨大衆芸能部門新人賞

- 2015年 林家正雀に入門
2016年 前座となる 前座名「彦星」
2020年 ニツ目昇進 「彦三」と改名

2023年

チケット
好評発売中

11月23日(木・祝)

蕨市民会館 コンクレホール

開場 13時30分 入場料 **500円**

開演 14時00分 (全席自由)

※未成年者の入場にはご遠慮ください ※前売券で完売の場合、当日券はございません

◆主催：蕨市民会館 ◆共催：蕨市

チケット取扱い所 蕨市民会館 048-445-7660 / 蕨市立文化ホールくるる 048-446-8311 / 戸田市文化会館 048-445-1311

お問い合わせ：蕨市民会館 〒335-0004 埼玉県蕨市中央 4-21-29 TEL 048-445-7660

演目 開口一番 前座
大店の犬 林家彦三
七段目 林家正雀

***** 仲入り *****

道具入り芝居
三遊亭團朝作
怪談牡丹燈籠 林家正雀
— 牽手堤の場 —

ワンコイン寄席

其の十一

芝居噺の事 林家正雀

道具を使う（高座に飾る）芝居噺を完成させたのは、幕末から明治時代の名人、三遊亭圓朝師匠と云われています。それ迄は、刀や鎌を使つての立回りを、銀扇（銀紙を貼った長めの扇子）だけでの立回りにしたのは圓朝師匠だそうです。

圓朝師匠の芝居噺を受け継ぎ師匠彦六（当時正蔵）に教えて下さった方が、圓朝師匠のお弟子の三遊亭一朝師匠です。

手取り足取り仕込んで下さったそうです。そこで師匠は、若手真打の頃から、芝居噺を高座に掛ける様になったのです。

道具を使う芝居噺は、江戸の芸でして、上方（大阪）には無かったのです。これは、東と西との文化の違いだと思われます。

東は職人中心の文化で、商人中心の文化だと思ふのが西のそれなんです。

当時のお芝居は、電気が無いので昼間しか開きませんので、昼の仕事をする職人は、芝居には行かれません。そこで夜しか開かない寄席に行くと、道具入りの芝居噺を見られます。それで、芝居を見た気になったのでしょうか。

大阪は、商人中心ですから、昼間の芝居を見に行かれたと思います。そこで、寄席での道具入り芝居噺を要望しなかつたと思うのです。

今日申し上げる「牡丹燈籠」の芝居噺は、圓朝師匠が芝居噺をお辞めになってからの創作ですから、圓朝師匠はお演りになってはいません。したがって、うちの師匠も演られませんでしたが、芝居噺には、もってこいの処ですので、「幸手堤」の場として拵えました。お付き合ひくださいませ。

牡丹燈籠 — 幸手堤の場 —

幕末・明治期に一世を風靡した三遊亭圓朝（一八三九～一九〇〇）が二十五歳で創作した『怪談牡丹燈籠』は、もとは中国明時代の怪異譚でした。圓朝は江戸初期に翻案された仮名草子を素材にして新たに実話なども取り入れ、より複雑で数奇な噺に仕立てます。因縁の糸に導かれて蠢く男女の愛憎のおぞましさを、これでもかというほど濃密に描きます。

物語は長大です。この噺を得意とした六代目三遊亭円生（一九〇〇～七九）は「お露新三郎」「お札がし」「栗橋宿お蜂殺し」「関口屋の強請り」など場面ごとに分けて演じていました。

長屋住まいの浪人萩原新三郎は武家娘お露と出会い、たちまち恋に落ちた。釜の十三日、お露は女中お米を連れて、牡丹燈籠を下げカランコロンと駒下駄を響かせながら新三郎のもとへ来る。以来、夜ごと通って逢瀬を重ねるが、新三郎は日ごとに瘦衰えた。店子で釣り仲間の伴蔵が興味津々で二人の様子を覗き見ると、新三郎は骸骨を相手にしていた。驚いて新三郎に教える伴蔵。死相が出ていると人相見が断じ、新三郎は二人の谷中の墓前で加持を受ける。伴蔵は存じ寄りの和尚から幽霊封じの仏像と護符をもらい、新三郎の家に護符を張り巡らした。護符のため家に入れず恨みを募らせたお露は、伴蔵お蜂夫婦に百両で札がしを頼む。欲に目がくらんだ伴蔵夫婦のために、新三郎はお露に祟り殺された。新三郎の葬儀を済ませると伴蔵夫婦は悪事露見を恐れ、伴蔵の故郷、日光道中の栗橋宿に引越す。百両を元手に荒物屋「関口屋」を開き繁盛した。だが伴蔵が料理屋の酌婦お国と懇ろになり、お蜂との仲がギクシャクしだす。なんと、お国はお露の義理の母親にあたる女で、不義をした挙句の零落だった。

今回、正雀さんが高座にかける「幸手堤」は、栗橋宿の外れ幸手堤での、お蜂殺しの場面です。